

# 笛吹市探訪

## 『ふるさとの祭り』十一 「芦川のすずらんの里祭り」



すずらん群生地の中を歩く



純白のかわいい花を咲かせる日本すずらん

ふるさとの祭りシリーズ第11回は、6月1日に行われるすずらんの里祭りと、芦川の春の祭りを紹介します。

### すずらんの里祭り

夏の訪れを日差して感じられる6月1日、芦川町では、町興しの一環として、昭和61年からすずらんの里祭りを開催しています。

芦川町に流れる芦川の源流域には日本でも屈指の広さを誇る群生地が広がっています。中でも見所なのが県の自然記念物にも指定されている「日本すずらん」です。かわいらしい小さい鈴のような形の花を咲かせ、また、優しい香りが特徴です。すずらん以外にも、この時期はアマドコロ（高さ40cm〜80cm。茎は数本の稜があり上部は弓なりに曲がる。地下茎に甘みがあるところからこの名がついた）、マイヅルソウ（湾曲した羽と白い花弁が鶴が羽を広げた形に似ていることからこの名前がある）など、高山ならではの山野草も見ることができます。

### 芦川の春の祭り

すずらんの里祭り以外にも、芦川の春には様々な祭りがあります。そのひとつに、新井原地区最大の祭り「蚕影神社の春祭り」があります。蚕影神社は、新井原の天狗山の山頂にある神社で名前のとおり養蚕の繁盛を祈願する神社で、祭神は稚産霊命（わかむすひのみこと）、御神体は鏡であると言われていています。長野県岡谷市から勧請したといわれ、「オカイコサマ」と呼ばれ親しまれています。

祭日は4月24日で、祭りの世話は新井原の各組（4つの組）が一年交代で受け持ち、その組の「神当総代」を中心に行います。お祭りの内容は、お神酒を供えて、繭型の餅を作り、大人が撒き子どもが拾うというシンプルな内容です。

昭和初期までは、他の芦川地区からだけでなく、旧上九一色村、八代町（奈良原・竹居）方面からも多数の参拝者があり、街の中心から天狗山の麓までの参道の両脇に提灯が吊るされ、夜店がたくさん立ち並び、その間は参拝者で溢れたといえます。そして、芦川に

嫁いで初めて祭りを迎える新婦は、花嫁衣裳を着て参拝しました。これは衣裳の原料が絹であったために「このような立派で、鮮やかな良質な繭が取れますように」と祈願するためのものであったといわれています。そのため参拝に来る新婦は芦川にとどまらず、周辺の町村にまで及びました。参道の出店には甘酒・ホウズキ・飴・駄菓子・金魚などが売られ、実に賑やかであったといわれています。

また、各家庭でも親族、縁者、友人が集まり、ご馳走を振舞いました。そのために家の米びつが底をつき、近所に借りに行くといった逸話も残っています。

現在は養蚕を営む家は芦川でもほとんどなく、祭りの規模は縮小しています。それでも祭りの当日は、新井原の祭り当番の組が出て、お札を配り、参拝客には餅を配ることで、祭りの存続に努めています。

稚産霊命…日本神話に登場する、五穀・養蚕の神。